

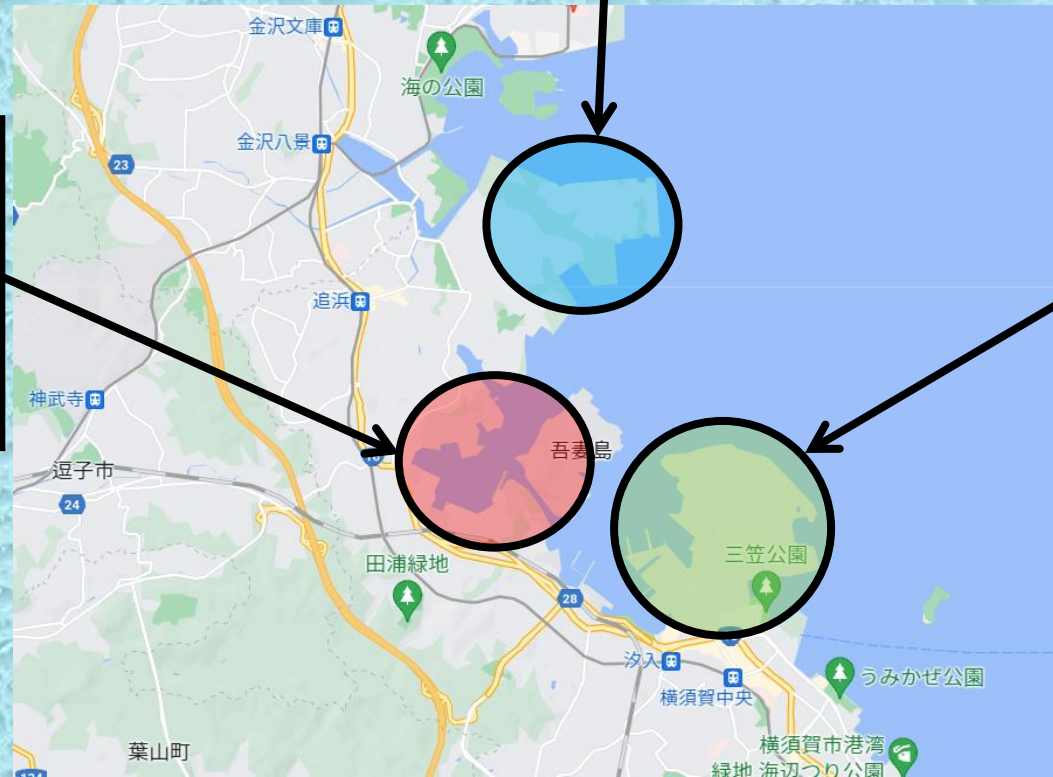
# 横須賀・追浜地区の今昔

戦前：横須賀海軍航空隊  
海軍航空技術廠

戦後：日産等の  
民間工場地区

戦前：横須賀海軍工廠  
造兵部・実験部

戦後：横須賀總監部  
自衛艦隊司令部



戦前：横須賀製鉄所  
横須賀造船所  
横須賀海軍工廠  
造船部・造機部

戦後：在日米海軍基地  
米第7艦隊司令部

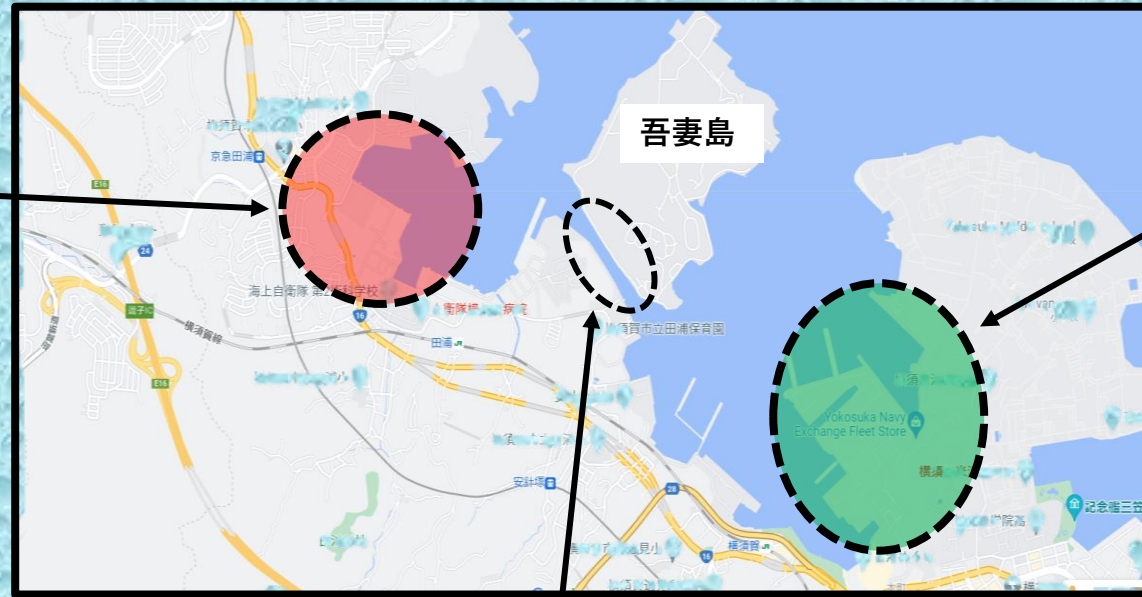
# 横須賀海軍工廠から戦後

## 横須賀海軍工廠

### 横須賀海軍工廠 造兵部・実験部

長浦湾は波が静かで小型船の停泊に適しており、水雷艇の練習場として最適なことから、明治17年に船越に水雷營が設置された。これが横須賀海軍工廠の造兵部の誕生である。造船部は艦艇に搭載する砲煩兵器、測的兵器等の開発、装備を担った。

造兵部、実験部の施設の状況は別図1を参照



### 横須賀海軍工廠 造船部・造機部

横須賀製鉄所、造船所の基盤となった横須賀地区では、その後艦艇を建造、艤装、修理する造船部、艦艇の機関開発、装備、修理等を担う造機部と分業化が進んでいく。

造船部、造機部の施設の状況は別図2を参照

### 箱崎半島の掘割

長浦に水雷艇の練習場ができた当時、横須賀一船越間の陸路は山また山の難路であり極めて不便であった。明治19年(1886)海軍は当時の箱崎半島を買収し半島の基部に両湾を通じる掘割を計画し、同年7月19日に開削工事に着手、明治22年に竣工開通した。現在は荒井掘割と呼称されている。



1945年（昭和20年）の船越・田浦地区の造兵部・実験部の施設の状況とその後。

造兵部地区では砲熏武器、水雷武器、無線機等の開発、製造がなされた。

当時の無線工場は現在は東芝ライラックが、水雷学校跡地には創設期の海上自衛隊が設置されその後第二術科学校（機関術科）となっている。

船越地区には電池、ジャイロコンパス、測距儀等の開発する実験部があった。戦後この施設を利用してミッションスクール栄光学園が誘致される。その後海上自衛隊自衛艦隊司令部となっている。

# 長浦・船越地区の現在



海軍実験部  
⇒ 栄光学園  
⇒ 海上自衛隊  
海上作戦戦  
センター

東芝ライテック  
(海軍造兵部本部)



海軍工廠造兵部本館  
(現東芝ライテック横須賀工場管理棟)

第二術科学校  
(海軍水雷学校)



# 横須賀海軍工廠 (電池・航海・光学実験部) (1936)



# 栄光学園(1947~1964) 船越地区

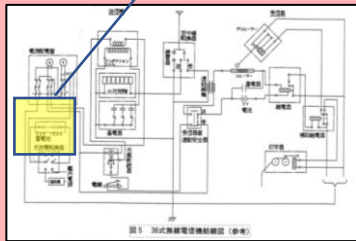


栄光学園70周年記念映像から

# 1917年横須賀船越に電池実験部設立

1903年

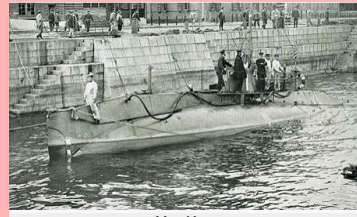
GS鉛蓄電池  
(島津源蔵)



36式無線機

1906年

潜水艇用蓄電池

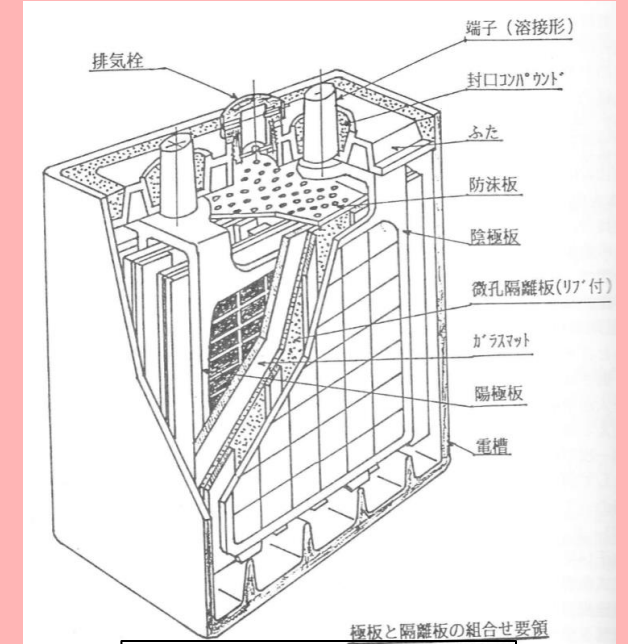


1号～5号潜水艇  
米国から輸入  
横須賀で組み立て

潜水艦用蓄電池  
の開発生産



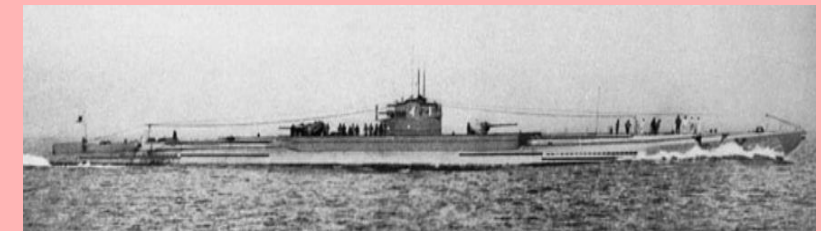
米軍撮影の空中写真 (昭和 21 年撮影)



極板と隔離板の組合せ要領

潜水艦用蓄電池

イ号潜水艦



大正に入り、無線通信機は真空管が支える時代になりました。

横須賀海軍工廠は、真空管研究を行い、マツダなどのメーカーに試作させた真空管の試験を行いました。



当時の日本を代表する真空管のブランド  
「マツダ真空管」「サイモトロン」  
いずれも東京電気株式会社（現：東芝）



万能真空管「ソラ」



海軍工廠造兵部本館  
(現東芝ライテック横須賀工場管理棟)

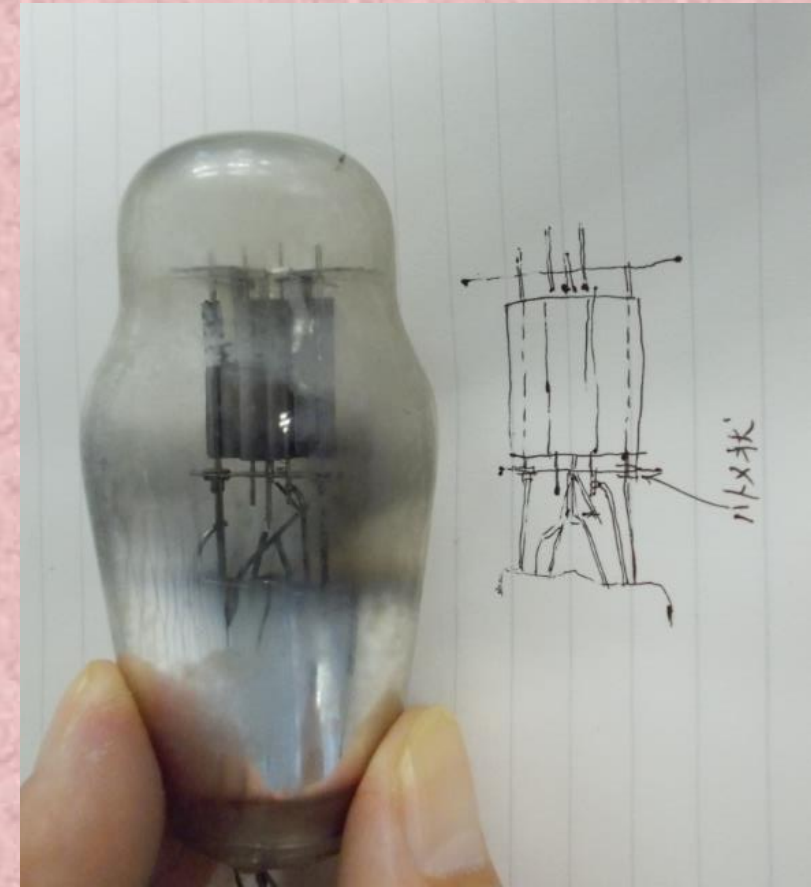
1940年代の太平洋戦争時には、海軍の要請を受け同航空隊向けに汎用真空管として「ソラ」が東京芝浦電気株式会社の西堀栄三郎氏（のちに南極観測越冬隊長）により開発されました。

# 貝山地下壕に残る無線技術の跡 真空管の発掘



56 (UY-56)  
検波増幅用3極管  
 $E_f=2.5V$   $I_f=1.00A$  (56Aでは $I_f=0.8A$ )  
並四ラジオによく使われている。5ピンUYベースでST-12型。27とピンコンパチブルだが、増幅率が高い。電極構造も現代的な構造になり、技術的に進歩しているように見える。特に昭和15年～終戦のラジオに多く使われた。戦時中の国産品はピンが真鍮や鉄で出来ているため、錆びやすい。

[http://www.geocities.jp/antique\\_radio\\_exhibition/tubes\\_st1.html](http://www.geocities.jp/antique_radio_exhibition/tubes_st1.html)



当時の標準的な三極管であることが分かる  
(太田先生による内部構造の解析)



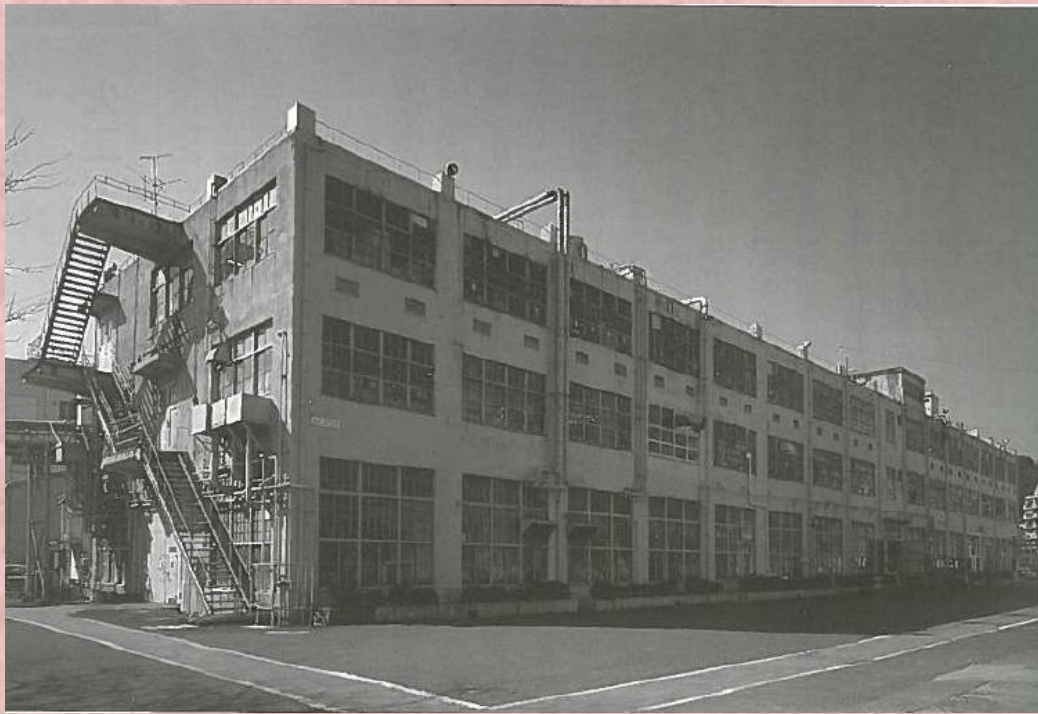


横須賀市船越の東京芝浦電気(株)横須賀工場（屋根に「マツダ真空管」の塗装）  
（写真：横須賀市自然・人文博物館蔵）



[http://www.kindai-kenchiku.com/yokosuka/yokosuka\\_lightec\\_1.htm](http://www.kindai-kenchiku.com/yokosuka/yokosuka_lightec_1.htm)  
<http://syowavoxx.web.fc2.com/kanagawa/yokosuka-shi/taura-meguri/>

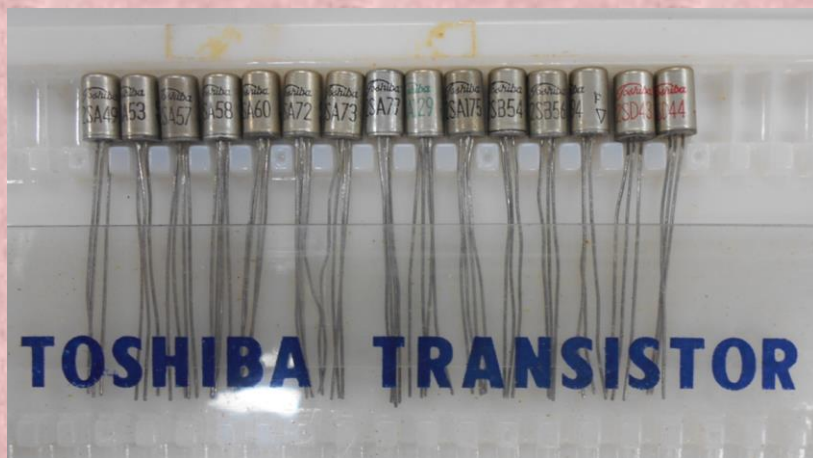
テレビジョン放送を実現させた横須賀生まれの真空管



東京芝浦電気（現東芝）は、トランジスタの生産を、真空管工場があった横須賀工場（船越）で行いました。



東京芝浦電気(株)横須賀工場で製造されたテレビ用真空管 12GB7  
(無線歴史展示室蔵)



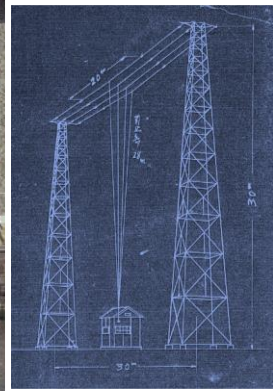
東芝で生産された初期のトランジスタ群  
これらは、パッケージに「見本品」と記載  
されていました  
(無線歴史展示室蔵)

# 横須賀長浦湾に捕鯨船基地

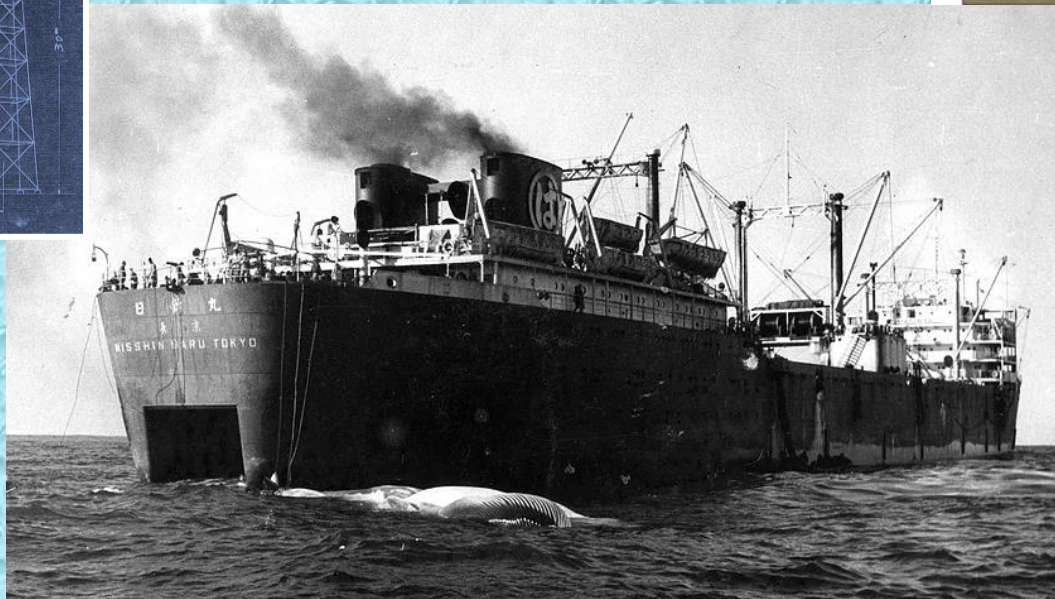


横須賀長浦港を出港する捕鯨船団  
(中央は母船の第一日新丸)

安立電気株式会社製受信機 R-11A  
(毛利邦彦氏所蔵)



横須賀本港の大洋水産の短波帯無線  
アンテナ鉄塔 (2本)



南氷洋で活躍する第一日新丸

<https://tetchi88.wixsite.com/hogei/about-2-cy2z>

# 捕鯨用平頭銚について

捕鯨用の銚は、銚の先端が平ら（平頭）になっています。当初は鋭利な形状の方が良いとされていましたが、先端を平らにした平頭銚の方が水中で直進することから、命中率が高くなることから平頭銚が主用されるようになりました。

この技術は、海軍において平頭弾として使われており、ヴェルニー公園の陸奥の主砲の説明版も参考になります。

## 戦艦「陸奥」主砲弾

本砲弾は「長門」型戦艦の主砲で用いられた砲弾で、九一式（昭和5年制式化）もしくは改修された一式徹甲弾です。

全長：1738.5mm  
(弾底から風帽先端まで)

重量：1020kg  
(風帽を含む)

最大弾体径：409.0mm

炸薬量：14.9kg  
(対弾丸重量比：約1.5%)

※展示の砲弾は塗色を剥がしています。

### ●一般的徹甲弾とは

砲弾の重量及び発射速度による運動エネルギーにより相手の装甲を貫通した後、遅延信管が作動して内部を破壊するようになっています。

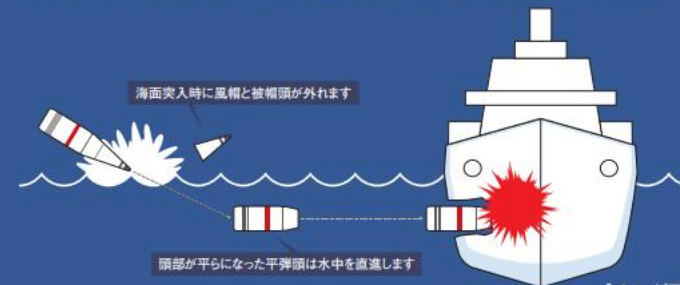
### ●陸奥主砲と本徹甲弾

本徹甲弾は、風帽・被帽頭・弾体等で構成され、発射に用いられる装薬は通常4個の薬囊で構成され合計量は約220kgです。



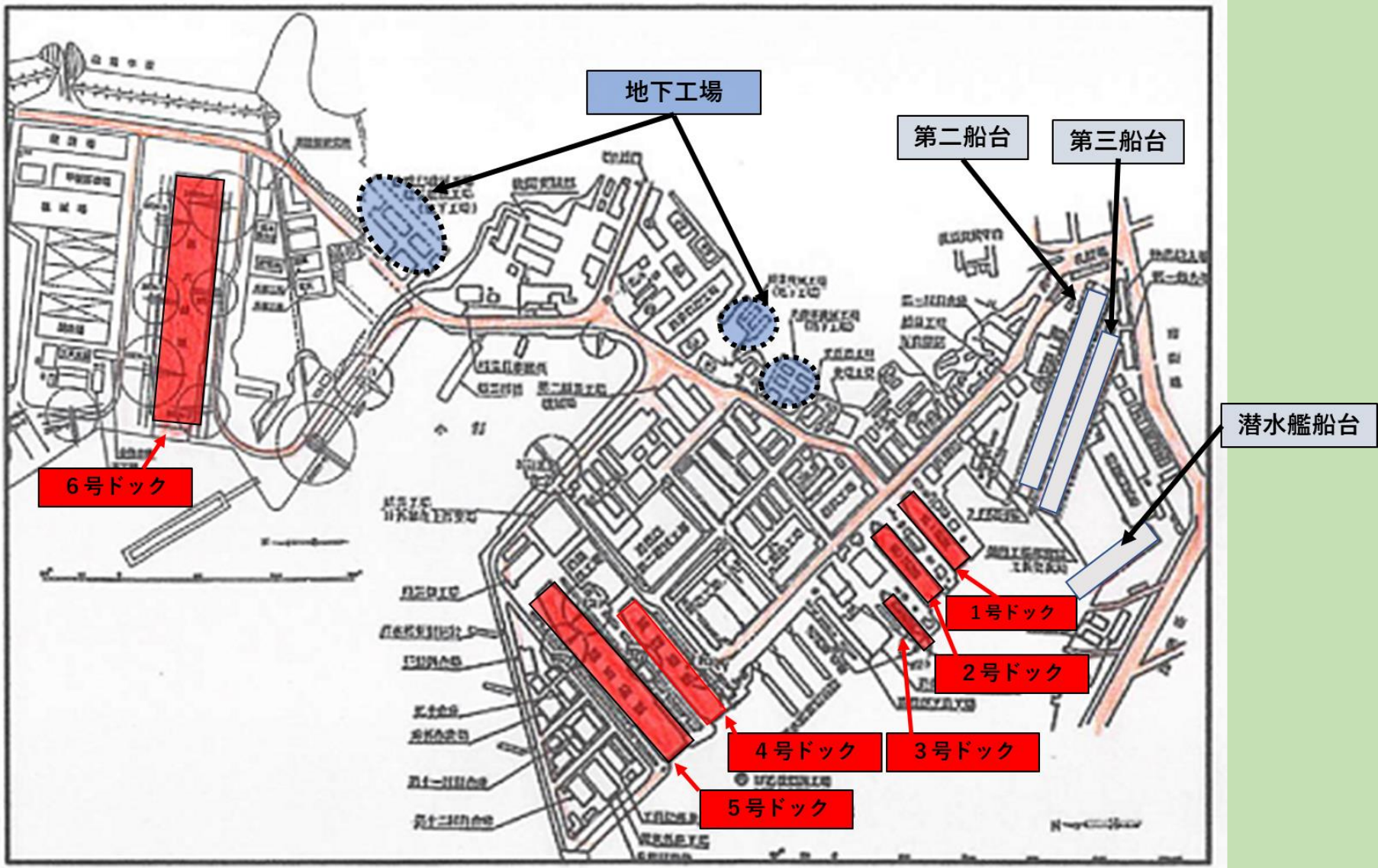
### ●本徹甲弾の特徴

浅い角度で海面に突入するように発射された本徹甲弾は、頭部が外れ、その後弾体（平頭弾）が水中を直進。水線下の船体に被害を与えます。



[イメージ図]

※海上自衛隊横須賀地方総監部及び有志の協力・支援により、移設・展示されたものです。



●艦を建造するための船台

●艦を修理するためのドライドック

がありました。

# 横須賀、今も現役で活躍する1号～6号ドック



## 横須賀海軍工廠時代

4号: 明治38年(1905)

日露戦争直後

5号: 大正5年(1916)

第一次世界大戦中

長門・陸奥用

6号: 昭和15年(1940)

大和型(信濃)用

現在米海軍空母用

## 横須賀造船所時代

1号: 明治4年(1871)

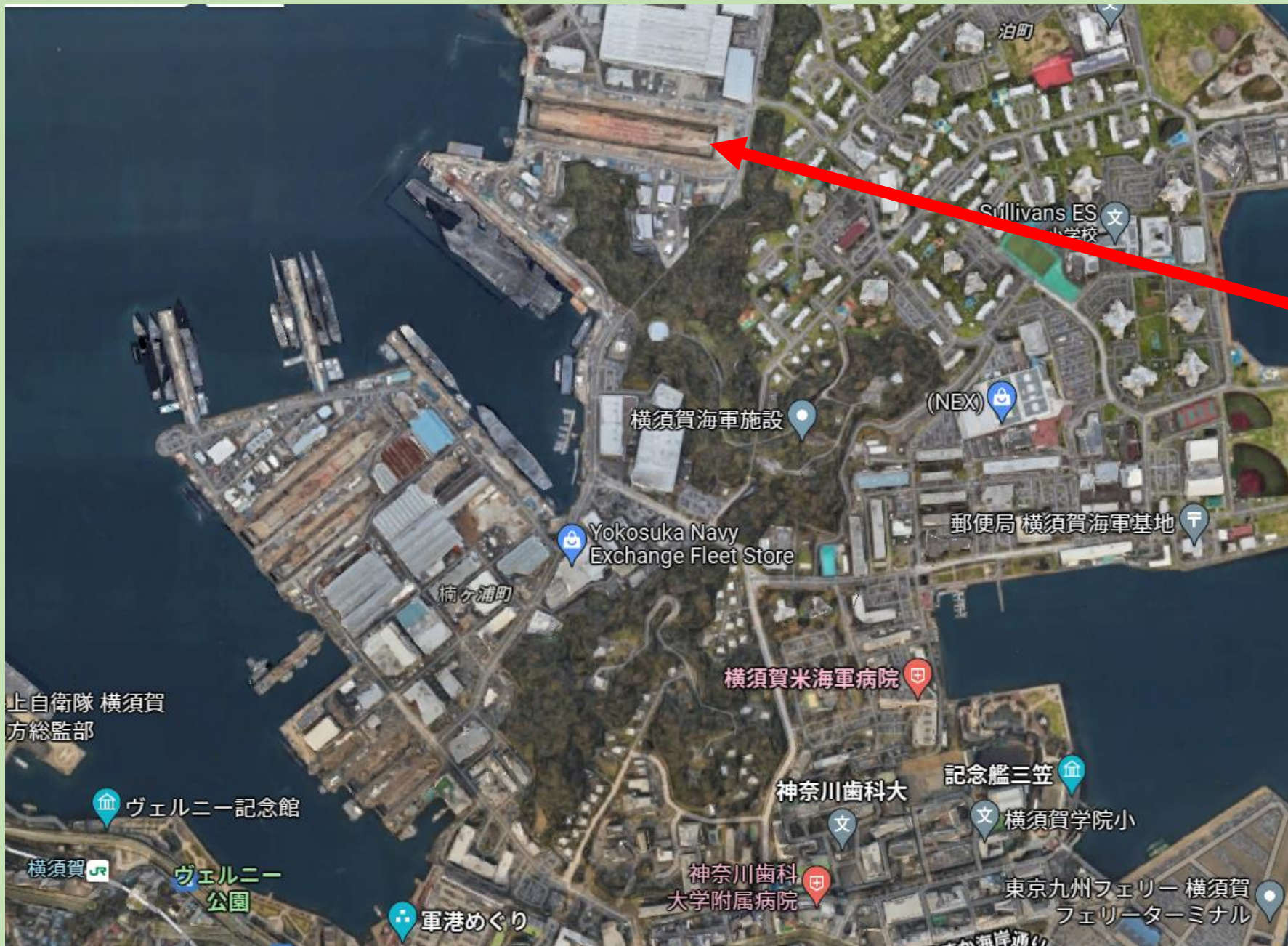
3号: 明治7年(1874)

2号: 明治17年(1884)

日清戦争明治27年

注: 大型の2号が3号の後に造られる





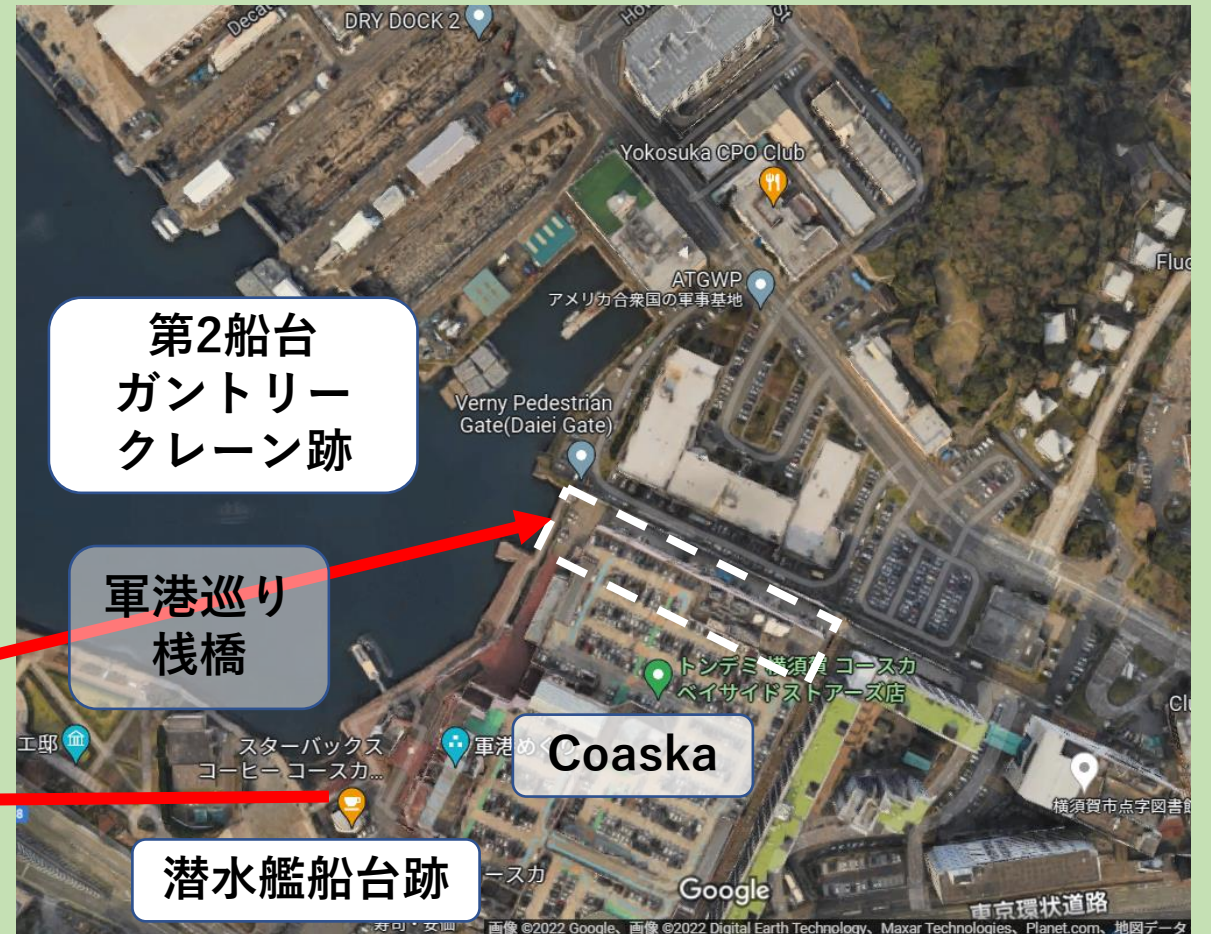
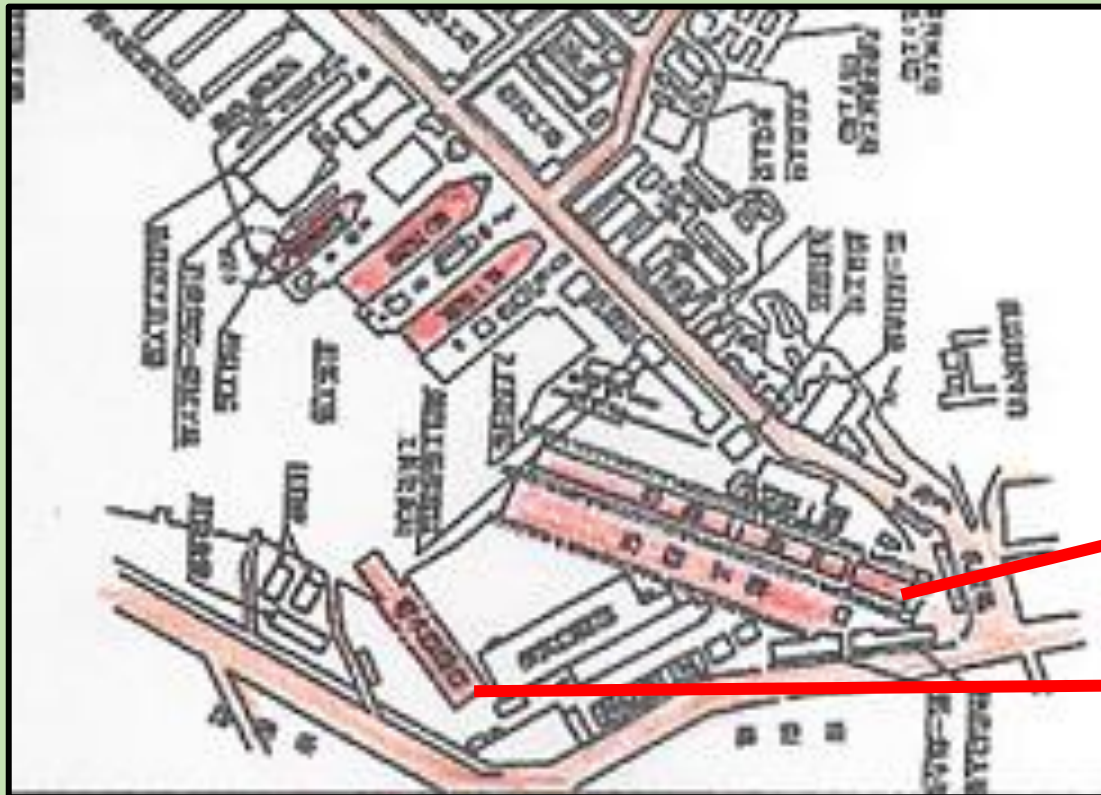
海軍工廠時代につくられた、船台は今は撤去されているが、1号から6号までのドライドックは今も現役として米海軍が使用している。

特に 6号ドック は昭和10年に起工、超大型建造ドックであり、悲運の空母と呼ばれた信濃はここで建造された。

現在は世界最大の米空母の修理に使われており、世界で唯一の米空母海外基地としてその即応体制維持に貢献しており、日米同盟を支える基盤の一つでもある。

# 今はなき、船台

- 初期の船台：旧第1船台から旧第3船台まであったが、それらは砂浜に木製の台座を設置した程度のものでした。
- 第2船台は明治39年（1906）に完成、明治41年（1908）年にガントリークレーンが完成する。
- 第3船台は明治38年（1905）に完成する。



# 第2船台(ガントリークレーン)は横須賀のシンボル

1907年(明治40年): 日露戦争のあとの軍艦国産化の要求から初代のガントリークレーンが完成。

1913年(大正2年): 新設計による大型ガントリークレーン完成。  
初代ガントリークレーンは、佐世保と舞鶴の海軍工廠に送られる。

1918年(大正7年): 戦艦陸奥の建造

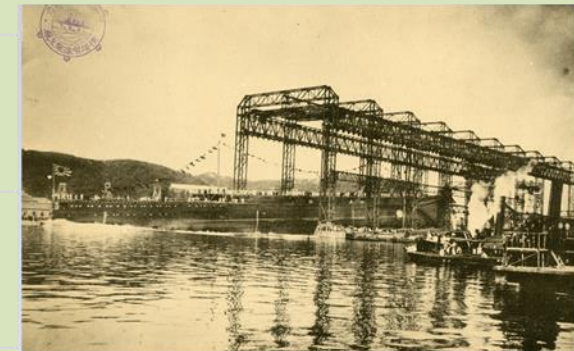
戦前・戦中は、日本海軍の主力艦 戦艦河内、比叡、陸奥など、多数の艦艇を建造。  
戦後はアメリカ軍の管理下に置かれ

1959年(昭和35年): 住友重機械に払い下げられ、輸出船などを建造。

1974年(昭和49年): 解体撤去されました。

⑨戦後の復興を支えた技術と人材  
/今につながる技術  
/造船・修理基盤  
も参考にしてください。

陸奥進水  
1920年(T9年)



初代  
1907

2代ガントリークレーン  
1913~1974

1870

1890

1900

1910

1920

1930

1940

1950

1960

1970

1980

軍港巡りの発着場の近くに小さな滑りがあるが、ここは、潜水艦建造用の船台の名残である。

大正9年（1920）に完成するが、関東大震災のために使用不能となる。

潜水艦船台



地下工場

第二船台

第三船台

6号ドック

1号ドック

2号ドック

4号ドック

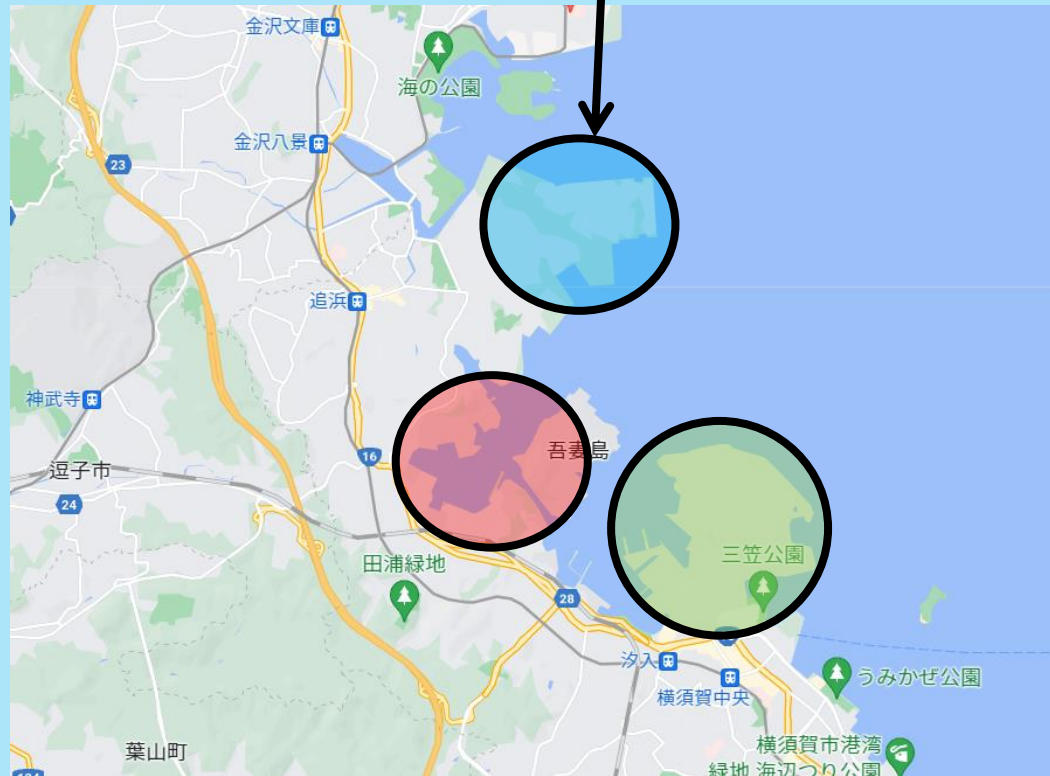
3号ドック

5号ドック

# 横須賀・追浜地区の今昔

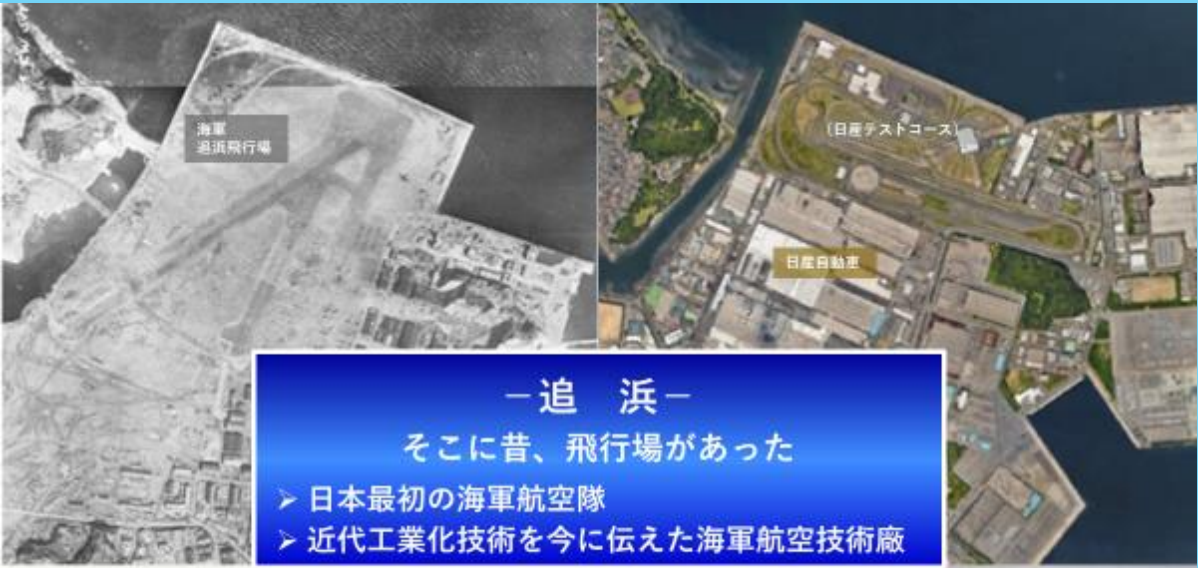
戦前：横須賀海軍航空隊  
海軍航空技術廠

戦後：日産等の  
民間工場地区



# 貝山地下壕を探查する元追浜行政センターの青木猛館長と YRP無線歴史展示室 太田室長





— 追 浜 —  
そこに昔、飛行場があった

- 日本最初の海軍航空隊
- 近代工業化技術を今に伝えた海軍航空技術廠



細部は

「5-2 横須賀海軍航空隊」をご覧ください。